

## 真の国際化に向けて

神奈川県 横浜市立青葉台中学校 2年

林 楊洋 (りん やんやん)

私は小学校六年生の時、中国から日本へやってきました。はじめは日本語が全く分からず、とても困りました。六年生の始業式では先生たちの話の意味が全然理解できなくて、黙って立っている自分がとても嫌でした。その後、国際交流ラウンジや日本語教室などで勉強して、少しずつ分かるようになってきました。

半年ぐらい経って、ある程度日本語が理解できるようになった時、理科でレポートを書く授業がありました。実験の後に考察やまとめなどを書く課題でしたが、「あなたは、やらなくてもいいよ。」と先生や友人に言われました。

きっとまだ日本語に慣れていない私を気遣ってくれたのだと思います。私は嬉しいはずなのに、なぜか周りの人との距離感を感じてしまいました。その時から、私はみんなとの違いに気づかされました。その後も周りの人たちはいろいろと配慮してくれました。漢字テストの時、私だけは漢字ではなく平仮名を書く。国語テストの時、私は読書する。こんな時、私は中国に帰りたかったし、昔に戻りたい気持ちになりました。

その頃、周りの人たちは私に対する優しさでそのように接してくれたのだと思います。その優しさのおかげで私は日本に慣れ、理解していくことができました。でも、私は外国人として特別扱いをしてほしくなかったのです。たとえ日本語が分からなくても、家に帰ってからネットや辞書で調べることができます。最初は、できなくても、教えてもらえれば、みんなと同じように仕事や勉強ができるようになるかもしれません。それでもできなかったなら、区別をしても納得することができます。日本人と同じようにやることによって外国人も早く日本になじむことができるでしょうし、日本人も外国人の考え方や習慣を理解することができると思います。

私は日本にきて外国人という立場になりました。でも、別の時に逆の立場を経験したことがあります。小学校三年生の時、成績のあまりよくない男の子がいて、私は軽く見ていました。その時、私はただ単にその男の子のことを、あまり言葉を喋らないだけかと思っていました。しかし、彼から

「自分の両親は中国人とアメリカ人で、去年初めて中国に来たばかりだ。だから、まだ中国語がよくわからなくて、テストの点数なども悪いんだ。」と言われました。

その時、その子は私にとって外国人でした。その頃の私は、彼をまるでアメリ

カの代表のように、「アメリカ人は何が好きなのか。」「何が嫌いなのか。」「アメリカ人はどう考えているのか。」というような質問ばかりをしていました。その時彼は「俺はアメリカ人の代表じゃないから。同じ国籍でも、みんな同じ考えや性格なわけではない。」と言っていました。その時はちょっとびっくりしましたが、今ではよく理解できます。

彼のことを外国人としてみていた私が、今度は日本のみんなにとって外国人になりました。みんなから中国の代表と見られて、中国のことを聞かれたり、質問されたりしました。

中国人という人がいる訳ではない、アメリカ人という人がいる訳でもない、一人一人の人間がいるだけなのです。

これからの時代はますます国際化が進むと思います。あなたがいつ異文化の中に入り、外国人という立場になるか分かりません。私が考える真の国際理解とは、外国人を特別扱いしないで、異文化を理解し、その人が本当に困っていることに寄り添い、手助けしてあげること、同じ人間、同じ立場で生きていく者同士として協力し合うことだと思います。そうする事の積み重ねが真の国際理解につながると思っています。